

1 チーム名 (研究対象領域・教科) 高等部 自立活動 (類ⅡB)
2 メンバー   高等部教員 3名
3 チームのテーマ 主体的なコミュニケーションの能力を高めるためには ～ 日常生活での活用をめざした指導 ～
4 対象児童生徒に願う主体的な姿 対象生徒Aは、朝のあいさつや日直として会の進行を行う際など、発声が求められている場面を見分けて声を出すことができている。また、かんたんな身振りもつけながら表現することができている。しかし、発声は不明瞭で音節もそろっていない。なお、休み時間など、リラックスした状態には「うるさいなあ」「おそいよ」等の特定の言葉を明確に発することもある。 「発声」自体に対する潜在的な力はそなわっているが、的確に意図して使うことができていない状態であると思われる。 手立てを講じることで、音数や口形を意識させ「相手によりわかりやすく伝えよう」とする姿勢を持たせたい。
5 研究仮説① 基本的な口形の確かめや、一音ずつ区切りながら発声することで音数を確認したりする。また、生徒が現在行うことができている発声を手がかりにしながら、日直や朝の会、帰りの会、挨拶などの日常生活の中での、口をしっかりと動かしたり、音数を数えたりしながらより明確な発音を促す。そうすることで、「わかりやすい発音」が促される。また、わかりやすい発音が周りの人たちから称賛されることにより、自主的に発音を改善しようとする姿勢が強化されると考える。
6 研究実践の内容① (1) 自立活動 (単位時間内) での取り組み  ○ 母音「あいうえお」の口形の確かめ 2単位時間程度、口形のイラストと共に母音の口形と発音を確かめた。 Aは口を尖らせてうなるように声を出すことが多かったが、口形を確認した後は口を横に広げたり大きく開いたりすることが促しやすくなった。  ○ 「あいさつ」の取り組み 1単位時間だが、「おはようございます」等の簡単なあいさつについて繰り返して練習した。その際、音数や明瞭な発声を意識させながら取り組んだ。 実際にあいさつを行っている場面を想定しにくい様子であったため、繰り返しての指導は行わなかった。  (2) 日常生活を通じた取り組み  ○ 一音ずつ区切る支援 朝の会の司会の際などで特定の言葉を発声する際に行った。 「お・は・よ・う・ご・ざ・い・ま・す」と、教師をまねて発声することはできたが、言葉の意味がとらえにくくなるとともに、時間がかかってしまうという欠点が明らかになった。そのため、言葉の最初の文字だけ取り出して発音を指導する方法に切り替えた。

○ 言葉の最初の文字だけ取り出した指導（「子音」の舌等の動きを促す）

言葉の最初の文字を取り出して、その語の「子音」をまねさせてから発声させた。「さ行」なら「s」、か行なら「k」等。

初めの文字の指導だけなので時間もそれほどかからず、「子音」を意識させることで聞き取りやすい発音を促すことができたと感じる。また、言葉自体はひとまとまりに発音するので、言葉の意味を失うことなく指導できた。

## 7 成果と課題

○ 以上の指導を行ったところ、次の改善が見られた。

- ・ すぼまっていた口の形に動きを与えることができた。
- ・ 言葉の語数が不明確であったが、言葉の語数にある程度合わせて区切りながら発声できるようになった。
- ・ 教師の促しに合わせて、いろいろな語を発声することができた。
- ・ 「うるさいな」「おそいよ」の他、「ティッシュ」等、明確に発音できる言葉が増えた。
- ・ 保護者から「最近はいろいろ話すんですよ。」という感想をもらった。

○ 日常生活の中で指導を工夫することができた。

● 特定の言葉が明確に話せた理由がよくわからない。観察を続けて次の指導への手掛かりとしたい。

● 発音が改善したことに対する称賛は十分ではない。保護者からの評価はあったが、発音の改善についてなのかどうかは明確ではない。意図的な称賛を加えてもよい。

● 舌の動きを促す指導として、薄い煎餅を用いた方法があった。機会をみて試してみたい。

● さらに効果的な指導法があれば、自立活動などの時間で個別に対応したい。